

千葉県立美術館の今後の方向性（まとめ） 概要版

令和5年1月27日
環境生活部スポーツ・文化局文化振興課

県では、県立美術館の今後のあり方を検討するため、令和3年12月に有識者による県立美術館アドバイザー会議を立ち上げ、美術館の今後の方向性についての意見を徴取してきました。

委員からは、これまで「アート概念の拡大に対応できていない」など、活性化に向けたさまざまな助言をいただいています。

本日開催した第5回目の会議では、県から新たな活動方針や今後の具体的な取組を提示し、議論しました。

1. 県立美術館アドバイザー会議について

(1) 概要

美術館の魅力の向上及び活性化に向けた議論を深めるため、美術館分野の学識経験者7名により、令和3年12月に設置。

アドバイザー会議委員

区分	氏名	役職等
座長	青柳 正規	山梨県立美術館長、石川県立美術館長 学校法人多摩美術大学理事長
委員	一條 彰子	独立行政法人国立美術館本部学芸担当課長
委員	貝塚 健	アーティゾン美術館 学芸員
委員	古田 亮	東京藝術大学大学美術館 教授
委員	保坂 健二郎	滋賀県立美術館長（ディレクター）
委員	水沢 勉	神奈川県立近代美術館長
委員	森川 嘉一郎	明治大学国際日本学部 准教授

(2) 主な意見

- ・アート概念の拡大に対応できていない。
- ・これまでの日本近代美術コレクションの蓄積をフルに活かすべきである。
- ・建物のポテンシャルを活かせていない。
- ・外部人材・能力の活用ができていない。
- ・地域全体を活性化させる役割を担うことができるよう、まわりの施設等ともしっかり連携している
と良い。

2. 今回提示した方向性

(1) 現状分析

本県の地域特性を踏まえた上で、県立美術館をめぐる開館以来約50年間の環境変化を整理し、開館当時に目指した姿を実現できているかを検証。

ア 千葉県の地域特性：恵まれた自然環境、旧佐倉藩等からの人材輩出

イ 開館（1974年）以来の環境の変化

県立美術館のコレクションの充実、アートのイメージの拡大、美術館周辺環境の整備

ウ 開館当時の理念「みる、かたる、つくる」は実現できたのか

アートの概念の拡大に伴う新たな県民ニーズには応えられておらず、美術の大衆化の拠点、創造の拠点は実現できていない。

(2) 目指すべき姿

開館当時の設置趣旨を踏まえ、環境変化に対応した新たな活動方針を策定するとともに、方針を具体化するためのキーワードを設定。

ア 活動方針

「千葉の文化的蓄積を踏まえて新たなアートシーンを創造する」という活動方針（案）のもと、県民と学芸員自身が誇りに思える世界に通用する美術館を作る。

イ 7つの「C」

活動方針を具体化するためのキーワードである

7つの「C」で県民の「Pride」を実現する。

↳ Challenge、Chiba (Collection)、Citizen、Change、Connect、Communicate、Collaborate



(3) 今後の取組

目指すべき姿の実現に向けた具体的なアクション、運営体制や展示事業、周辺環境整備の取組を定める。

ア 具体的なアクション

- ・近代洋画などのコレクションを活用するとともに、現代美術など新しいアートの作品を充実させる。
- ・本県の豊かな自然を活かし、野外空間での展示などによりアートな景観を創出する。
- ・アートとの出会いにより、子どもたちの感性を豊かにはぐくむ。

イ 運営体制の強化

・人材確保

館長及び将来の幹部候補となる職員について、美術館での豊富な実績を持つ専門人材を外部から確保。学芸員以外の職種の活用や学芸員の育成、キュレーションなど外部との連携を図る。

・組織

広報や地域連携など、これから更なる充実が求められる機能を担うセクションを新設する。

・事業予算

展示の自主企画には数年を要することから、中長期的な計画に基づいた予算の確保を図る。